

平成 30 年度

海外教育（特別）（実践）研究 C 「韓国」 報告書

（2018 年 9 月 12 日～9 月 19 日）



上越教育大学

H30 年度 海外教育（特別）（実践）研究 C（韓国）参加者名簿

【参加学生】

No.	所属（大学院 修士課程）		性別	氏名	フリガナ	学年	班
1	教科・領域教育専攻	生活・健康系教育実践コース (保体)	男	山本 仁士	ヤマモト ヒトシ	M1	1
2	学校教育専攻	グローバル・ICT・学習研究コース	女	丸山 香織	マルヤマ カオリ	M1	1
3	学校教育専攻	道徳・生徒指導コース	女	佐瀬 千恵	サゼ チエ	M1	1
4	学校教育専攻	道徳・生徒指導コース	女	関野 香織	セキノ カオリ	M2	2
5	教科・領域教育専攻	言語系教育実践コース (英語)	女	杉本 美幸	スギモト ミユキ	M2	2

【指導教員】

No.	所属	性別	氏名	フリガナ
1	芸術・体育教育学系	女	時得 紀子	トキエ ノリコ
2	国際交流推進センター	女	藤谷 元子	フジタニ モトコ

平成30年度 海外教育(特別)(実践)研究C(韓国) 日程表

旅行期間 : 平成30年 9月12日(水) ~ 平成30年 9月19日(水)

目的地 : 韓国教員大学校及びソウル市 (国名: 韓国)

参加者 : 大学院学生5名, 引率教員2名(時得教授, 藤谷准教授)

日 程

日	月 日	出発地／到着地	現地時間	交通機関	用務先(宿泊地)
1	9月12日(水)	羽田空港集合	10:00		
		羽田空港 発 金浦空港 着	12:05 14:25	アジアナ航空 OZ1075便	
		金浦空港 発 韓国教員大学校 着		(大学校バス)	[韓国教員大学校 泊]
2	9月13日(木)	韓国教員大学校			教育及び交流プログラム 等 [韓国教員大学校 泊]
3	9月14日(金)	韓国教員大学校 韓国教育大学校 発 ソウルホテル 着	夕方	(大学校バス)	教育及び交流プログラム 等 [ソウル市内 泊]
4 ～ 6	9月15日(土) ～ 9月17日(月)	ソウル市滞在			文化研修 [ソウル市内 泊]
7	9月18日(火)	ソウル市ホテル 発 新龍山小学校 着 新龍山小学校 発 ソウルホテル 着			教育実践, 視察 等 [ソウル市内 泊]
8	9月19日(水)	ソウル市ホテル 発 金浦空港 着	13:30		
		金浦空港 発 羽田空港 着	15:30 17:35	アジアナ航空 OZ1045便	
		手続き修了後 解散 (各自で上越に帰る)			

【宿泊場所】

9/12, 13 韓国教員大学校

忠北清原郡江内面屋根裏里山7番地

9/14～18 新羅ステイ麻浦 (ホテル)

ソウル市麻浦区麻浦大路83

Date	Time	Schedule	Place	Note
September 12 (Wed)	14:30 -	Gimpo arrival	Gimpo Airport	
	15:00 - 17:30	Off to Knue		
	17:30 - 18:00	Welcome meeting	Meeting Room, 2 nd floor	
	18:10 - 18:20	Off to Restaurant near KNUE		
	18:20 - 20:00	Welcome Dinner	Restaurant near KNUE	
	20:00 -	Break Time	Ham-in Dang (Dormitory)	
September 13 (Thu)	07:40 - 08:40	Breakfast	Ham-in Dang Restaurant	
	10:00 - 14:00	Educational Field Trip	Attached Elementary school of KNUE	Including Lunch
	14:00 - 15:30	Field Trip (Educational Museum)	Educational Museum of KNUE	
	15:30 - 17:30	Club performance (Korean traditional music Club)	Student's Hall	
	17:30 - 18:30	Off to Cheongju downtown		
	18:30 - 20:00	Farewell dinner	Downtown Restaurant in Cheongju	
	20:00 -	Break Time	Ham-in Dang	
September 14 (Fri)	07:40 - 08:40	Breakfast	Ham-in Dang Restaurant	
	09:00 - 11:00	Off to Seoul		
	11:00 - 12:00	Experiencing Korean Traditional Clothings and Crafts	Korea Tourism Organization	
	12:00 - 13:00	Lunch		
	13:00 - 14:00	'Korean Wave' Experience Center	Korea Tourism Organization	
	14:00 - 15:00	Making Korean Traditional Food (Rice Cake)	Korea Tourism Organization	
	15:00 - 15:30	Off to Hotel in Seoul		
	15:30 -	Individual Schedule		Program End

※ Above program schedule can be changed during the program.

上越教育大学研修団学校訪問の日程

- 訪問日時：2018年 9月 18日(火) 08:30~13:40
- 訪問場所：ソウル新龍山小学校
- 訪問者数：学生 5名，教授 2名(引率者)，通訳者 1名
- 細部の日程

時間	内容	場所	備考
08:30~08:50	学校到着		
1時間目 (09:00~09:40)	歓迎会	講堂	リコーダーと合唱団の公演 校長先生の学校紹介と挨拶 スケジュールの案内
2時間目 (09:45~10:25)	授業参観	教室	3年8組
3時間目 (10:45~11:25)	研修団 授業実践	教室	4年9組 1班 授業実践
4時間目 (11:30~12:10)	研修団 授業実践	講堂	5年1組 2班 授業実践
12:10~13:00	昼食	食堂	
5時間目 (13:00~13:40)	学校長対談	校長室	校長室にて談話

韓国の教育に対する期待の大きさを感じた研修

所属 生活健康系教育実践（保健体育）

氏名 山本 仁士

韓国教員大学校

韓国教員大学校は国立の教員養成大学で、いわゆる難関大学である。毎年受験者は高倍率の試験に合格しなければならない。韓国における教員のステータスは高く、職業としても魅力的な分野であるということである。また韓国教員大学校の学費は無償であるということだ。韓国のすべての国立大の学費が無償であるわけではない。韓国政府が、優秀な人材を教育者に養成し、豊かな教育を提供する期待の表れであると感じた。それだけではなく、施設の素晴らしさからもそれを感じることができた。広大な敷地に素晴らしい施設。この広さは韓国の大学では中程度のように、そのことにも驚愕した。日本と比較すると、かなりの広い敷地と施設の充実ぶりだと感じた。

我々が宿泊した寮は学生のそれとは少し違い、他国からの留学生や教頭、校長クラスの現職教員が研修する際に宿泊する施設とのことであったが、ビジネスホテル並みの施設であり、充実ぶりが伺えた。2日目に附属の小学校を訪問した。韓国教員大の附属小学校ではあるが、児童は地域から入学してくるいわゆる普通の小学生。入学試験があるわけではない。そこで働く教師はエリートであり、優秀。自ら教育過程を創造し、また、教育大学で開発された先進的教育過程を実験的に実施する目的もあると聞いた。その施設は韓国トップレベルであり、韓国の小学校がすべてこのような充実した施設であるというわけではないとのことであったが、なんと3Dプリンターまで完備されていた。「未来教室」と言われる教室ではPCの環境はもちろんだが、プロジェ



クターが教室の壁面2面に6台ほどのスクリーンとプロジェクターが完備され、チームごとに学んでいる内容をスクリーンに映し出しながら学びを深め合っているアクティブラーニングが行われていた。1000万円をかけて新設した教室であるとのことであった。

また二日目の午後には、伝統的な打楽器の演奏「サムルノリ」を体験した。韓国教員大学校のサークル生と一緒に楽しく演奏できた。非常に熱心に、また友好的に接してくれたおかげもあり、最後は簡単な合奏をすることもでき、



これも大きな達成感を得ることになった。NANTA という代表的なリズムパフォーマンスが韓国では有名だが、「リズム文化」のようなものがベースにあると感じた。

教育博物館見学



韓国の教育の歴史について学ぶことができた。「教育」というカテゴリーのみで博物館があるということにまず驚いた。日本にはない施設だろう。狩りや農業、家庭の中での生きていく上で必

要な知恵や知識を学んだというところから始まり、論語などの哲学、性理学（生きていく上での哲学的な考え）につながり、そこから教科に分化していったことがわかった。「学ぶこと」の意義や必要性をしっかりと定義しており、この施設の存在自体が韓国の教育に対する思いを表しており韓国人のアイデンティティを物語っていると感じた。

貴重な3日間の韓国教員大学校でのプログラムをプロデュースしてくださったスタッフのみなさん、ほぼ全過程において同行してくださった通訳、学生ボランティアスタッフのみなさんに感謝したい。本当に貴重な3日間であった。

ソウル新龍山小学校について

2校目の訪問先は公立の「新龍山小学校」であった。ソウル市南部に位置し、比較的都会の中心にある小学校であり、もともとは「日本人村」があった地域ということもあり、親日ムードを感じることができた。



歓迎セレモニーでは学校内からオーディションで選抜された楽団による演奏が披露された。リコーダーの合奏、ダンスをまじえたミュージカルふうの合唱はいずれもレベルが高く、本当に感動した。音楽専門の先生が指導しているということで、志願者が後を立たず、オーディションをするくらいだということなので、熱の入れようが伝わってきた。今大流行で、ハイレベルと言われている「K-POP」の源流がここにもあるのかもしれないと感じた。

またグラウンドが人工芝で、トラックはオールウェザーであった。体育の授業ではドッジビーをしていたが、その環境の素晴らしさに驚愕した。地域のサッカーチームのために人工芝のグラウンドを設置したということで、このような施設は非常に珍しいとのことだった。

校長先生との懇談で印象に残っていることは、「オフスタイム」で教員が帰宅する。その後は家族との時間を大切にしたり、大学院に通う現職教員もいたりするようだ。日本のような部活動が放課後にあって拘束されたり、授業準備や事務仕事の処理に追われて何時間も残業するというようなムードは微塵も感じられなかった。当然、子供との関わりの難しさや保護者への対応など、ストレスのかかる仕事だということは変わらないが、仕事とプライベートの切り替えが出来ていると感じた。また部活動は希望する職員を別に雇用して賃金を支払って実施されているようだし、外部委託のパターンが多いようで、希望しない教員がいわゆる日本の「ブラック部活動」のように苦勞することはないようだ。日本の教育関係者は海外のこのようなシステムを積極的に学び、考えを改め、部活動問題、教職員の多忙化解消に努めていただきたい。そして本来の教員の業務である授業等に集中できる環境を整えるべきだと切に感じた。

授業実践について

授業実践では、私たち1班は現職教員3名で「フルーツバスケット」を用いて、日本の文化を紹介し、日本語を話すという授業を行った。韓国教員大学校附属小学校については、「英語」を用いずに、「新龍山小学校」では、途中「英



語」を用いて実践した。「フルーツバスケット」というアクティビティは韓国では用いられていないということが事前に分かっていたので、日本の中学生をモデルにして実際にフルーツバスケットを楽しんでいる様子を動画にし、説明を交えて見せることができたことは有効であった。先輩方、先生方からのアドバイスで動画を事前に撮影した。言葉の壁があるし、時間も短いので、わかりやすく説明するためには有効だと感じた。また通訳の方と綿密に打ち合わせをしておいたので、授業の流れや内容を通訳の方が理解していたことも授業が成立する上で、重要なことだと感じた。優秀で気の利く通訳さんや、学生ボランティアの協力もあり、達成感のある授業が展開できた。また、子供達は非常に積極的で、感想や質問を求められる場面では挙手をし、しっかりと自分なりの意見を述べることであった。「楽しかった」の一言で終わらずに、自分なりの表現で、「まるで日本にいるみたいだった」など、主張や発言に個性が感じられた。反省点としてはやはり日本語（平仮名）を読むことが難しく、フルーツバスケットの鬼役がカードに記された6つの事柄を選んで読むところであまり読めないため、私が一緒に発音するという



支援をしたが、その時点で声が漏れてしまうという、フルーツバスケットのゲーム性を損なう結果となったことが残念であった。またパワーポイントに動画を挿入して作成してお

いたが、その動画が動かず、残念な結果であった。韓国の PC は Windows を使用しているが、当然ハングルで示されるので、突然のエラーに対応しづらいという点もある。できることなら、日本から持参したノート PC を HDMI ケーブル等で簡単に繋いでいただき、いつも使い慣れている PC で授業を実施したほうが無難だと感じた。

文化研修について

8 日間の長きにわたる研修ではあるが、中日には OFF もあり、自主的に文化研修を計画し、実施した。難解なハングルだらけの街で、地下鉄に乗り、目的地にたどり着くこと、街を散策してリアルな文化に触れることは大変有意義であった。



我々はオプションツアーで、旅行会社が企画する「世界遺産を巡る旅」に参加したが、ガイドの丁寧な説明があり、またホテルまで送迎してもらえるなど、時間を有効に使ったツアーで、韓国の世界遺産や、歴史的な町並み、昼食を堪能した。その建造物がなぜ建立され、どのような仕組みであり、どのような意味が有るかを全てにおいて説明してもらえた。そして、深い意味づけがされているとことが、自国の文化や歴史を大切にしようとする韓国の愛国心を感じた。

またホテルでの食事は基本的に自分たちで手配することになるので、ホテル界隈のレストランで地元料理を堪能し、仲間と一日の振り返りをしたり、思っていることを語り合えたりすることは大変楽しかった。韓国の代表的な料理やお酒も十分堪能することができた。食文化を楽しむことも研修の重要な一部だと感じた。

終わりに

一言で言えば、得がたい経験をした、貴重な 8 日間であったということだ。プライバー

トな観光では決して知ることのできない韓国教員大や小学校訪問。研修授業実践にふさわしい内容で大変満足している。4月に出会ったばかりの履修した仲間とのコミュニケーションや指導案作成など、苦労はあったが、終わった時の充実感や達成感は格別であった。我々のグループは現職教員3名での授業であったので、ベテラン教師の強みを生かした事前の準備、授業はライブであり、その場での咄嗟のトラブルにも臨機応変に対応できたことが成功の鍵でもあったと感じている。そして何より、韓国の小学生の素晴らしさだ。これは万国共通なのかもしれない。瞳をキラキラさせ、知的好奇心旺盛な子供達とふれあい、共に学びあえる「教育」「教室」というのはやはり素晴らしい時間、空間であると改めて感じる事ができた。

この研修を希望したときは参加者も少なく、実施が困難な状況であった。また男性一人の参加ということで、不安も多い研修であったが、個性的で優しいメンバー、知識、経験豊富な先生方に恵まれ、有意義な研修であった。費用の面や、時間的な余裕度など、ストレートの大学院生や学部生にとってはハードルの高いプログラムなのかもしれないが、現場に出る前に、学生の今だからこそ体験して欲しい海外教育実践である。また現職教員も毎日の大学院での日々が再確認の日々ではあるが、海外での教育実践は今の日本の教育現状を俯瞰してみる大変有意義な機会となると思う。この経験を今後の研究や現場での指導に生かすことはもちろん、教員である前に人間としての幅を広げていくことに繋げていきたいと感じている。多くのことに、人に感謝して、報告とする。カムサハムニダ！

韓国での出会いと学び

所属 グローバル・ICT・学習研究コース

氏名 丸山 香織

1. はじめに

(1) 韓国教員大学校での出会い

ボランティア学生3名と通訳1名との韓国教員大学校での3日間は、大きな収穫だった。通訳さんは英語も日本語もよく話せる。学生の1人は英語が堪能、日本語もかなり話せる。2人の学生は日本語があまり話せないが、英語は話せる。4人のコミュニケーション能力の高さに、私たちもすぐに打ち解け、色々聞いたり尋ねたりした。そして、私よりずっと若い4人が日本語で伝えようとしてくれているのに対して、私は韓国語を知らなかった。英語でのコミュニケーションは、自分の英語力が乏しく伝わらないことはしばしばあったが、ジェスチャーを交えて時には通訳してもらいながら、お互いの気持ちが通じていろいろな発見があったのは、とても楽しく新鮮だった。おかげで、その後の文化研修や新龍山小学校では、自分から積極的なコミュニケーションをとろうと意識が変わった。

(2) その土地の言葉

今回韓国に行くにあたり自分の英語力を付けて、コミュニケーションができれば嬉しいと思っ



ってはいたが、肝心の韓国語を知ろうとは考えていなかった。様々なコミュニケーションの方法はあると思うが、その土地の言葉を使うことは、その土地の人に対する心配りではないかと感じた。私はそれを理解せずに、韓国に来てしまったことを少し後悔した。藤谷先生が事前学習時に、「韓国のお店で韓国語を話せることを目標に」と言っていた意味がようやく分かった。

2. 韓国と日本の教育の比較

(1) 共通点

教室の配置や教室環境など日本と同じような学校の作りであった。今回2つの小学校の授業を参観し、ボランティアの学生のみなさんの話を聞いて、小学校ではグループやペア学習などの協同学習を行っているのに対して、中学校ではその割合が減少する。高校では、教師主導による講義形式の一斉授業が多くなり、大学入試に向けた学習になるところも似ていると感じた。



(2) 相違点

ソウル新龍山小学校では、先生方と一緒に給食を食べて情報交換ができた。その話の中で、韓国では、現場の教師

の7割が修士号を取得している（または教師をしながら修士号を取得する）、そして1割が博士号を取得しているということだった。日本では修士号を取得している教師が2，3割ではないだろうか。教師文化の中に、キャリアアップを目指して学び続けていくことが当たり前であるということを感じた。

教育環境では、ICT 機器の充実に圧倒された。各教室にパソコン、プロジェクタがあり教師が容易く授業で使えるような環境が整っていた。また、課外活動を民間に委託したり、教師の研修が学校で衛生受信できる機会があったりし、教師の負担が少ない。授業のプログラムを民間で作成している会社もある。

日本では、教師として学び続けていくことが必要であると感じてはいても、多忙化によりそれどころではない。多忙化の原因の1つに、授業だけでなく様々な活動をすべて学校教育の中で行っていることが考えられる。また、教育環境も充実しているとは言い難い。

教師の専門性を高めるための機会、教育環境の充実、教師の仕事の見直しなど、もう少し日本も国をあげての検討が必要ではないかと感じた。

3. Teaching Practice に対するふりかえり

(1) 教育者として成長したこと

3人の授業者で授業を作り上げたが、それぞれが経験豊富な教員であり、準備、通訳の方との打ち合わせ、3人の意思疎通などどれも心配はなかった。2つの学校で PowerPoint の動画が映らないハプニングと、予想より早く授業が終わりそうにはなったが、その場で機転をきかせて難なく乗り切ることができた。言語は違っても、私たちが狙っていた日本文化を知ってもらうことができて、授業中の子どもたちに笑顔があふれていた。これが一番の収穫だった。言語はもちろんのこと、言語で伝わらない部分を補うような授業者の表情、目線、間のとり方も欠かせないコミュニケーションであると感じた。そして、授業者同士、通訳の方や担任の先生、授業を行う子どもたちとの信頼関係が必要だと感じた。



(2) 教育者として見えてきた今後の課題など

韓国教員大学校の附属小学校では、特徴的だと感じたことが2つあった。まず授業形態では、机や椅子の配置が活動によって工夫され、子どもたちが全員前を向いているような授業はなく、どのクラスもグループ活動を行っていた。また授業内容にも工夫されていて、パソコン、プロジェクタや拡大投影機などの ICT 機器は、全クラスで使用されていた。音楽と算数とプログラミングを



組み合わせた教科横断的な授業や、日本の有名な漫画の動画を使っの円周率の授業等、興味深い授業ばかりであった。

新龍山小学校では、参観授業の内容が「錯視」で、想像力を養う授業だった。日本で錯視について授業で扱うことはほとんどなく、想像力も図工等しか考えられなかったため新鮮だった。「想像力を養う」というねらいにも興味をもった。

韓国では、日本の「主体的・対話的で深い学び」を実現するような授業が、当たり前に行われていたことに驚いた。教育者としての本質である授業に全力を注いでいて、自分自身の授業について考えるきっかけとなった。それと同時に、韓国では教師が授業に全力を注ぐための必要な環境が整っていてうらやましく感じた。

4. おわりに

現職派遣教員として、日本との教育の違い、韓国での授業実践、国際交流を実際に体験できたことは、自分の財産になるとつくづく感じた。「百聞は一見に如かず」やはり見て体験することは全然違うと感じた。研修に参加した方々、先生方、国際交流センターの皆様、自分の体調で大変ご迷惑をおかけしましたが、貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。



海外教育研究 C（韓国）での実践を終えて



所属 道徳・生徒指導コース

氏名 佐瀬 千恵

1 はじめに

私がこの授業をとったきっかけは、同じ英会話スクールに通う知人に誘われたからだった。現職派遣で上越教育大学大学院に入学し、英語の教員免許を取得中の私にとって、「英語で授業実践ができるよ！」というお誘いはとても魅力的で、その知人と初めての会話にも関わらず、「参加します！！」と即答していた。

事前の授業は、少人数で、とてもアットホームな雰囲気の中行われた。特に今年は学生 5 人中 4 人が現職派遣という異例のメンバーで、全員歳が近かったこともあり、毎時間とても楽しく参加することができた。

韓国での 7 泊 8 日の生活は、様々なことがあった。困難もあり、それを乗り越えることでまた、仲間との絆が深まった。「人は、何歳になっても成長することができるんだ」と実感できた旅だった。

2 授業実践について

(1) 事前準備

授業実践は、韓国教員大学校附属小学校とソウル新龍山小学校の 2 校で行った。

英語での授業実践ができると張り切っていたが、韓国教員大学校附属小学校からは、日本語での授業をお願いしますという連絡が入った。

共通語である英語が使えなくなると、日本語での実践になり、それを通訳してもらう時間を考えての指導案作りになった。授業時間は 40 分しかないため、内容を厳選した。

私たちのグループは、「日本の有名なものを知ろう」というテーマのもと、食べ物・建

物・スポーツの3つの分野から、「天ぷら」「団子」「城」「大仏」「柔道」「駅伝」の6つの言葉を、フルーツバスケットを通して教えることにした。

(2) 授業実践

実際に授業をしてみると、子どもたちはとても楽しんで授業に参加してくれた。ソウル新龍山小学校では、英語を使った授業をしたが、やはり発音が悪かったためか、英語が通じず、そこにまで通訳が入ることになってしまった……。フルーツバスケットは、韓国ではやらないということだったが、ルールを説明すると、子どもたちはすぐに活動することができた。(やはり、エリート集団だった



からなのか?)

フルーツバスケットを行うにあたって、先生より、「韓国は競争社会で、負けることをとても嫌う。鬼になる生徒への配慮をした方がよい」とのアドバイスがあった。そのため、「鬼」を「リーダー」と呼んだり、鬼になった子どもにドラえもののシールを貼ったりした。授業での様子を見てみると、鬼になったからと言ってそんなに悲しむこともなく、純粋にゲームを楽しむかわいい小学生ばかりだった。時々、何と言っていいかわからず、悲しい顔をしている子どももいたが、そこは教師や通訳さんが笑顔でフォローし、ゲームが順調に進んだ。順調すぎて時間が余るくらいだった。

2校とも、子どもたちはとても活発で、活動に関しては日本の小学生と変わらない様子だった。しかし、授業後の感想や質問は、消極的な日本の小学生とは違い、積極的に挙手をする児童が多かった。内容も高度で、しっかりと自分の意見や考えを言えていた。



(3) 授業実践で感じたこと

事前に聞いていて、なんとなく予想はできていたことだったが、学校側との事前の打ち合わせや、パソコンの使用の打ち合わせなどは2校とも一切なかった。そのため、事前に送っていたパワーポイントの動画が見られるのかなどの確認が全くできなかった。その結果、2校とも動画が動かないというハプニングが起こった。今回は授業者が全員現職ということもあり、そんなハプニングにも動じずに授業を続けることができたが、前回の授業でもこのようなことがあったそうである。こちらも、この授業実践のために、事前に動画の撮影などを時間をかけて行っている。その努力を無駄にしないためにも、今後は大学側からも、授業実践の事前打ち合わせの時間をとれるように小学校側に要望すべきであると感じた。せっかくの授業準備が無駄にならないようにしてほしい。

3 日本と韓国の教育の違い

(1) 授業の様子

韓国教員大学校附属小学校では、ほぼすべての授業でグループワークを行っていた。日本のように、先生が一つのことを教えるのではなく、テーマをもとに、子どもが自分たちでパソコンで調べ学習をしたり、物を作ったりしていた。先生は、各グループを回り質問を受けたり、前にいて、質問に来る子供の対応をしていた。質問をしなければ、わからないことはそのままになってしまうので、子どもたちは積極的になるのだと感じた。

また、「国語」「算数」・・・などの一つの教科の授業というよりは、「算数と理科と総合」のように複数の教科を組み合わせた授業もいくつかあった。

日本では、各教科で教科書があり、その指導書もあるため、若手でもベテランでも授業内容に大きく差がでることはない。韓国の授業は日本よりも自由であるが、同じ学校でも教師の力によって授業展開が異なるため、学級ごとの授業の進度に差が出てしまうのではないかと感じた。

(2) 教材・施設・制度の充実

附属小学校でもソウル新龍山小学校でも、先生方が ICT 機器を駆使した授業を実践していた。パワーポイント、電子黒板、テレビなどがほとんどの教室で使われていた。

ソウル新龍山小学校の先生のお話によると、韓国では、教員の研修制度が充実しており、日本のように研修施設に行かなくても、学校にしながらインターネット等を通して研修を受けることができるとのことだった。また、学校で使う ICT の教材は自分で作るのではなく、教材を学校が買って使っているの、日本の先生のように放課後教材研究をして夜遅くまで学校に残ることはないとのことだった。（ほとんどが定時の 17:00 くらいには家に帰れるとのこと。）うらやましい限りだった。

また、韓国では部活動を学校の教師が無償で教えることはなく、ほとんどは外部の人が教え、もし学校の教師が教える場合も、お給料が出るとのことだった。

そのため、韓国の教員は放課後に大学院に行くこともでき、教員の 7 割は修士課程を、1 割は博士課程を卒業しているとのことだった。そのようにして、教員の質が上がり、子どもにより良い授業を提供できるようになるため、子どもの学力も自然に上がっていくということがよく分かった。



附属小学校校内には、廊下に英語学習のための小道具がいくつかあった。
図書室にはゴロゴロできるソファも！



ソウル新龍山小学校のグラウンドは、人工芝とアスファルト！
グラウンドの奥にはブックカフェもあった。

4 その他

(1) 韓国教員大学校の学生との交流

今回の8日間の研修の中で、3日間は韓国教員大学校の学生さんたちと行動した。学生さんたちは、英語と日本語で会話をしてくれたが、私たちが英語をほとんど理解できなかったため、スマホの翻訳を通しての会話や身振り手振りでの会話が多かった。皆さんとても親切で、楽しい交流になった。(歳の差がかなりあって、教え子と会話しているようだった。) 特に思い出に残ったのは、伝統音楽の体験とお菓子作り体験だった。



(2) 文化研修

文化研修は3日間あり、日本語の通訳さんがガイドをしてくださる世界遺産ツアーに参加した。以前にソウル旅行をした際には行ったことがなかった「水原華城」を見ることができた。

文化研修の日程は自分たちで決められたので、それまでのタイトなスケジュールから一変し、ゆっくりと自分たちのしたいように動くことができた。



世界遺産の水原。

とても天気の良い日で、青空と芝生の色の対比がきれいだった。

昔の街が城壁で囲まれていて、敵に攻められた時の対策がたくさんあった。

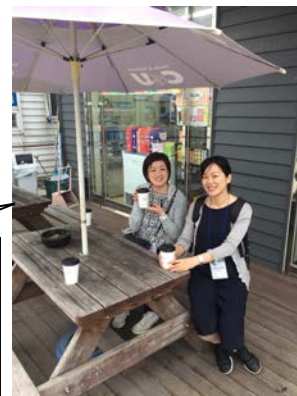
ツアーで一緒になった日本人の家族と仲良くなり、食事をした。私一人ではできないことでも、知らない人にも積極的に話しかけられる仲間と一緒にだったからできた。

自分から心を開けば、相手も心開いてくれることを改めて実感した。これは、教師としてとても大切なことだと思った。

(3) 言葉の壁

今回の研修全般を通して感じたことは、言葉の大切さだった。文化は違えども、せめて英語が話せれば、自分の思いを伝えることができるのに、それができないもどかしさを何度も感じた。しかし、事前に先生からいただいていたちょっとした韓国語の日常会話のプリントを駆使し、お店などでは、「こんにちは」→「アニョハセヨ」、「ありがとうございます」→「カムサハムニダ」、「領収書（レシート）ください」→「ヨンスジュンジュセヨ」、「水ください」→「ムルジュセヨ」など、韓国語を使ってみると意外に通じてうれしかった。海外に行く前に、その国の文化や言葉を勉強しておく、旅も数倍楽しくなることが分かった。

韓国に行って、初めてコンビニで英語とジェスチャーを使ってコーヒーを買った♪



5 おわりに

今回の研修がとても充実したものになったのは、藤谷先生のおかげです。藤谷先生は、授業実践に関してとても細かいところまでアドバイスしてくださったり、指導案を英語にして韓国の学校に送ってくださったり、日程を調整してくださったり、すべて一人で請け負ってくださいました。また、私たちが慣れない海外旅行で不安なことがあっても、すべて藤谷先生が対応してくださり、解決してくださったことで、全員が何事もなく無事に研修を終えることができました。先生には感謝しかありません。本当にありがとうございました。

また、事務手続きをしてくださった、国際交流チームの渡辺さん、お忙しいところ、一緒に研修に参加してくださり多くの笑いを提供してくださった時得先生、ありがとう

ございました。

最後に、今回一緒に参加した杉本さん、山本さん、丸山さん、関野さん、皆さんと韓国に行くことができ、最高の思い出ができました。最高の仲間に恵まれて、最高の旅になりました。ありがとうございました。チーム・ザ・韓国！最高♡カムサハムニダ☆

海外教育(特別)研究C「韓国」での学び

所属 道徳・生徒指導コース

氏名 関野 香織

1. 実習校で感じた韓国の教育と日本との比較～相違点・工夫点・共通点～

日本以上の学歴社会であると言われる韓国。特に、英語教育においては、社会的問題にも発展した程、熱心に取り組まれていると聞いていた。しかし、実際に二つの小学校を訪問してみても、子ども達はとても伸びやかで、素直で、英語に限らず、どの分野の授業にも積極的に、熱心に取り組んでいた。日本との相違点として、特に感じたことが二点ある。一点目は空間や環境の整備に力を入れている点である。韓国教員大学附属小学校では、教師や部外関係者が休め、コミュニケーションできるスペースがあり、校内や教室の内装や美観にも工夫や配慮がされていた。新龍山小学校でも、広大なグラウンドに芝生が敷かれ、整備されており、子ども達が思いっきり遊んでいたのが印象的であった。人が一定期間過ごす環境は、利用する人のことを考えた空間であるべきである。学習に必要な集中力を発揮し、良いパフォーマンスができる為にも、緊張と緩和のバランスや健康を維持する為の環境維持は、各学校の状態に応じて、日本でも今後、取り組んでいく課題だと思う。



二点目としては、給食の提供方法である。日本では、子ども達が当番制で自分たちのクラスの配膳をして、クラスで食べるのが一般的である。給食の時間も作法や栄養の観点から教育の一部として考えられ、教師はそこでも指導を求められる。韓国では、



学年ごと順番に食堂に集まり、トレーを持って、順番に食事を受取るスタイルであった。先生も同じように並んで、一緒に食事



日本と同じように米飯中心。食育に力を入れていて、野菜が多めの献立。

を取っていた。どちらの方法にも、メリット・デメリットがある。大事なのは、子ども達につけたい力の優先順位を見極めた上で、重きを置く活動を絞り、それぞれの実情に応じ

て実践していくことであると考えている。

授業の工夫点として、両学校とも「歴史・文化」に関する教育に力を入れていた。学校では、校外学習に行くことが多く、新龍山小学校には、近くに国立中央博物館や戦争記念館があり、博物館プログラムと呼んで利用していた。また、参観させてもらった授業では、錯視について興味を持たせる為に、教師が縞々模様の服を着て、教材を有効に使いながら授業しており、「子どもたちに楽しく、ワクワクさせながら、体験する機会を増やす」ことに力を入れて取り組んでいるように感じた。いわゆる、「アクティブラーニング」は日本でも積極的に行われているが、そこにユーモアを取入れていくことも、見習うべき点であると感じている。



スマホにかざすと立体に変身！

日本との共通点として感じたことは、地域との連携である。新龍山小学校では、校庭に地域の人も利用できる図書スペースが設置されていた。日本でも、コミュニティスクールと言って学校、地域、保護者が力を合わせて学校の運営に関わる取組みが為されている。子どもの将来の為に、学校や地域そして、保護者が調和して子ども達を育てていくことが改めて大切であると感じた。

2. Teaching Practice に対する振り返り

(1) 授業の構想について

私達のグループは、授業に関して三つのねらいを立てた。一つは日本の伝統的な「風呂敷」を通じ、実際に触れたり、結んでみたりすることで、日本の文化に関心を持って親しむこと。二つ目は、韓国の「ポジャギ」と比較することによって、子ども達自身が、自国の文化を見直す機会をもつこと。三つ目に、それ等を活用して自然や環境を守るために、「できることから始めてみよう」という意識を持てることである。

現在、日本や韓国でも、風呂敷やポジャギが積極的に活用されているということはない。しかし、風呂敷やポジャギは環境を守る観点から、その有効性が再評価されている。個人レベルの小さな行動であっても、その積み重ねが、自然を守ることに繋がるということを、子ども達自身が自覚できる授業を行いたいと考え、構想した。

(2) 事前の授業準備について

授業の準備過程では、韓国の子ども達に「どうしたらわかりやすく、風呂敷を結んでバッグを作ることを教えられるか」ということが一番の課題であった。何度も自分たちで風呂敷を結びながら、それに適した英語表現等を考えた。また、韓国の子ども達の英語のレベルも分からない為、できるだけ難しい表現を避け、簡単に理解できることを意識した。それでも伝えにくい部分は日本語で説明し、通訳をしてもらうことを前提で、指導案を作成した。同時に、子ども達が、視覚的にわかることも意識し、風呂敷の見せ方も工夫した。授業のリハーサルで、先生や1班から、英語の発音をチェックしてもらい、わかりやすく包み方を伝えられるアドバイスがもらえたことは、とても有意義であった。



(3) 実際の授業について

韓国の子ども達は日本にとっても興味を持っている子が多く、温かく私達を迎えてくれた。実際に風呂敷を結んでバッグを作る過程を見せてから子ども達に実践してもらったが、予想どおり、すぐに結べる子、なかなか結べない子に別れた。その際は、1班からも手伝ってもらいながら机間指導を行った。言葉が通じなくても、一緒に作業することで、全員、風呂敷バックを作ることが出来た。



授業の結末で、マータイ博士の言葉「MOTTAINAI」の言葉から環境を守ることの大切さを話す場面では、難しい説明にも真剣に耳を傾けてくれていた。また、質問時間では、時間が足りなくなる程、日本についての質問が沢山上がった。子ども達は、日本のことを知りたくて仕方のない様子であった。



当初から、私達グループの課題は、『盛沢山な内容』であった。本当は「風呂敷を包む」

という実践で日本の伝統文化と韓国の文化を比較することだけでも良かったのかも知れない。しかし、「環境を守る為にも、私達の国の文化が役に立つ、一緒に見直していこう。」というメッセージを発信したかった。その思いの実現に、何度も検討し、試行錯誤したが、それが、子ども達にどれだけ届いたかはわからない。それでも、授業中の子ども達の真剣な眼差しや授業後の笑顔から少しでも伝わっているのではないかと感じている。

3. 足で巡ったソウル～文化研修での思い出～

今回の研修では、3 日間の文化研修の時間があった。事前に目的地までの行き方や地下鉄の乗り方等を勉強してから臨んだが、韓国語のハードルは高く、降りる駅を間違ったりしてハプニングもあった。それでも、ソウルの街を歩きながら、素敵な出会いに恵まれた研修になった。1 日目は、宗廟(チョンミョ)からタプロク公園に行き、仁寺洞(インサドン)を通って、景福宮(キョンボックン)を見学した。さらにそこから曾溪寺(チョゲサ)を拝観して、普請閣(フシンガク)を見て、ホテルに戻った。帰り道、どの地下鉄に乗ったらいいのか不安になり、韓国観光公社という案内所で、日本語対応のスタッフの方に教わりながら無事に



悠久の歴史に感動！

帰ることができた。2 日目は、東大門へ行った。興仁門を最初に見学した後、近くに漢陽都城博物館があり、職員から、韓国の歴史と四大門のエピソード等を聞いた。四大門を含む城郭の一周は約 13 km(歩けない所を含めると約 19 km)であり、ハイキング感覚で城郭沿いを歩くことができる。私も城壁を歩いてみたが、一つ一つの石段がとても大きく、この城郭を制覇するのはかなり時間がか



韓国の Hero！紙幣にも！

かと思った。その後は、東大門市場やデパートでショッピングを楽しんだ。3 日目は、独立門(ソデムン)に行って、ソデムン刑務所を見学する予定であったが、あいにく月曜日はほとん



どの公共施設が休館日であった為、見学することが出来なかった。それでも、世宗(セジョン)大王像やその近くの大韓民国歴史博物館等を巡ることが出来た。以上のように3 日間はとにかく、自分の足であちらこちらを巡った。朝にはホテル周辺を散歩し、キムパブを売る屋台のお

ばちゃんと話をしたり、トッポキやオデン、マンドゥを地元の人に交じって、食べたりと韓国のB級グルメも楽しんだ。そのお陰で、韓国に1人で来ても「大丈夫!」という自信を持つことができた。

4. 終わりに

国際理解教育は、多くの先進諸国の教育で行われている。日本でも小学校から各学年にあった取組みが為されている。しかし、一部の教員に任せきりになる、英語活動の実施がすなわち国際理解に繋がるといった誤解や、単なる体験や交流活動に終わる等、国際理解教育の内容そのものに疑問視されているところもある。衣食住に関わる全てにおいて、諸外国の支援無しでは、生活が成立しない現在の日本社会において、その教育の在り方を見直すことが急務であると、研修を通して感じた。私は韓国が日本から多大な迫害を受けてきた歴史をこの研修の中で学んだ。博物館や美術館を巡る先々で、母親が子どもを連れて熱心に歴史を教えている光景を何度も目にした。歴史の爪痕を今尚、後世に伝えるべく展示されている場所で胸が締め付けられる思いであった。それでも韓国の人々は日本人の私を温かく受け入れてくれ、そして私達を知ろうとしてくれた。世界の人々が、国を超えて理解し合い、互いに人間として尊敬と信頼をもって協力し、世界の平和を実現することを理念とした教育であるならば、互いの歴史や生活習慣、文化を実際に知るという体験がますます必要であると思う。「知る」ことができれば、不安や怖さは無くなる。それが無くなれば、今度は自分自身の力で一歩が踏み出せるはずである。現在の学校教育の中では難しいところもあるかもしれない。しかし、形や方法を模索し、工夫しながら、私が感じたような体験を多くの子ども達に感じて欲しいと改めて思っている。

韓国での海外教育研究 C に参加して

所属 言語系コース（英語）

氏名 杉本 美幸

1 はじめに

海外へのアクセスが容易になった今日、数日の休暇であっても海外旅行を楽しむことができるようになった。しかし、個人的な渡航で国外の学校現場を視察できる機会に恵まれることは稀である。日本と距離も関係性においても非常に近い韓国の、しかも小学校を訪問でき、さらに授業実践ができるという本海外研究 C の内容に魅力を感じ、受講を決意した。以下に、受講と 8 日間の研修を振り返り、学んだことや所感をまとめる。

2 日本を海の外から見つめて

2. 1 学校現場の違い

韓国では、韓国教員大学校附属小学校とソウル新龍山小学校の 2 校を訪問した。どちらの学校も新潟県の平均的な小学校と比べるとかなり大規模校であった。まず、1 学級の児童数が韓国教員大学校附属小は 20 名前後、ソウル新龍山小学校は 30 名前後と多すぎず、教員についても専科がそれぞれの学校で 10 名前後おり、児童一人一人に多くの教員がかわりやすい環境なのではないかと感じた。また、専科教員がいることで、学級担任が受け持つ授業が少なくなり、教材研究に時間がかけられるのではないかと推察した。

また、教員の研修制度が充実しているようで、国が主催する研修に多数参加できる他、オンラインでの研修を勤務校にしながら受けることもできるそうである。そうした研修を通じて有用性の高い教材やカリキュラム等を入手することができる。さらに、民間の企業



写真①教科「創意力・体験学習」の学習の様子（ソウル新龍山小学校）

が提供するものも多くあり、有料ではあるが、学校ごとに幅広く利用しており、教師は授業のねらいに合わせて、多様な教育的資源の中から教材・学習材を準備することができる。そのようにして、質の高い授業を効率よく準備できることは、日本の教育現場とは大きく異なっている。課外活動はほとんどが外部機関に委託されており、教師が勤務時間を超過して残業することは少なく、夜間大学院に通ってマスターやドクターを取得する人もいそうである。このような充実した研修制度のもと、専門性の高い教師が質の高い授業を保証しているのではないかと推察された。

2. 2 文化施設の違い

文化研修で大韓民国歴史博物館を訪れた。そこは、韓国の 19 世紀末の開港期から今日に至るまでの歴史を伝える展示となっている。地上 8 階建ての大規模なきれいな建物であった。驚いたのは、観覧料金が無料だったことである。日本の国立博物館はほとんどが大学生以上有料である。他にも訪れた施設、ハニャン（漢陽）都城博物館（第 4 項で詳細を説明）も同じく無料であった。帰国してから調べたことだが、国立中央博物館も特別展は有料だが、毎月最終水曜日は「文化のある日」として国内の主要文化施設が無料、または割引になる日があるのだそうだ。

また、大韓民国歴史博物館には、子ども、学生、成人の他、外国人をも対象にした多様な教育プログラムが用意されていた。パンフレットには、「苦難と逆境を乗り越えて発展してきた大韓民国の歴史を後世に伝えとともに、国民の誇りと願いを込めて未来の希望を語る歴史文化空間」と謳われていた。

これらのことから、国が国民に文化に触れる機会を多く提供しようとしている姿勢や、自国の文化や歴史について後世に確かに語り継ぎ、さらに訪れる外国人にも伝えていこうとする思いを感じた。文化や社会教育に対する価値観の違いを感じた。

3. 授業実践を通して

3. 1 テーマ「見直そう！先人の知恵から生まれた実用的な道具

—風呂敷とポジャギを使ってみよう！—

3. 2 ねらい ①日本の風呂敷について知り、実際に触れたり、結んだりしてみる。

②ポジャギ（韓国の伝統的な包み布）と比較する。

③風呂敷やポジャギの有用性を知り、活用場面を考える。

3. 3 韓国教員大学校附属小学校

4年生を対象に授業を行った。児童は素直そうで落ち着いた授業態度だが、反応を積極的に返してくれるという印象であった。日本の風呂敷を紹介した後、実際に風呂敷を一人一枚ずつ配り、包み方を体験してみる活動をもった。子どもによっては結び玉を作るのが難しい子もいたが、もう一つの班の方々がサポートに入ってくれたので直接支援することができて助かった。風呂敷を使ってみての感想を求めたところ、次のような発言があった。

＜児童の感想＞

- ・（風呂敷で包むことで）教科書を運ぶのが楽になる。
- ・ 風呂敷の活動をしたら、日本にいる気持ちになった。 ⁽¹⁾
- ・ 日本の子どもたちがこのような風呂敷をもって学校に通っているのが素晴らしいと思った。 ⁽³⁾
- ・ 風呂敷は色もいいし、やわらかくてよかった。
- ・ ポジャギも同じようにショッピングに使ってみようと思った。 ⁽²⁾

積極的に手が挙がることに驚いた。また、⁽¹⁾、⁽²⁾のような教師が期待する発言が出てくるのはやっぱり附属小だからだろうと考えていたら、受験で入学してきた児童ではなく、この小学校の近隣地域に住む児童が通う学校という日本の公立小学校と同様の学校であることを知り、さらに驚いた。⁽³⁾の発言を受けて、日本では風呂敷が使われることは少なくなり、子どもたちも鞆に教科書等を入れて学校に通っていることを補足説明した。その後、環境保護の視点から、今日日本でも風呂敷が見直されつつあることを紹介し、授業を締めくくった。想定していたよりも授業がスムーズに進み、残った時間は質疑応答にあてた。

授業の内容に関するものより、「日本にあるおいしい食べ物を教えてほしい」などといった日本に対しての質問が多く出た。通訳の方も、子どもたちが日本人と触れ合う機会はそう多くはないため、興味関心が高まったのだらうと語ってくれた。



写真②授業の様子（韓国教員大学校附属小学校）

3. 4 ソウル新龍山小学校

5年生を対象に授業を行った。非常に落ち着いた授業態度で、身体も大きく、日本の6年生くらいの発達段階との印象をもった。活動の後に感想などを問うと、ここでも日本の子どもが風呂敷を使って学校に通っているのか質問が出たので、正しく説明した。他には、「日本では何年生を担当しているのか」といった授業者に対する質問や、「日本語をうまく話せるようになるにはどうしたらいいか」、「日本の有名なサッカー選手に会ったことがあるか」といった個人の関心に応じた質問がいくつかあった。

この学校の対象学級は事前に聞いていたため、記念の風呂敷をプレゼントとして用意していたが足りなくなり、予備として持参したものを急遽プレゼントに代えた。確認したところ、直前に2名転校



写真③授業の様子（ソウル新龍山小学校）

生があったとのことだった。おそらく保護者の仕事の都合等で増減の多い小学校なのだろうと感じた。このようなことがあるため、準備が必要な個数は多めに見積もっておく必要

がある。

4. 文化研修から

トンデムン（東大門）駅近くにあるハニャン（漢陽）都城博物館が非常に印象的であったので、紹介する。1396 年、朝鮮王朝の都である漢城と外部との境界を示し、外部からの侵入を防ぐために、現在のソウルであるハニャン（漢陽）を囲むように四つの山をつなぐ城壁、漢陽都城が築かれた。総長 18.6 k m であり、現存する世界の都城のなかで最も長い間、都城としての役割を果たしてきたと言われている。日



写真④都城の様子（漢陽都城博物館付近）

本統治時代とその後の近代化の過程でかなりの部分が破損したが、その後の発掘と復元事業により現在は約 13 k m まで復元された。約 12 時間で都城を巡ってぐりと一周歩くことができる。近代化したソウルの名立たる街がこの都城の内に納まっていることを初めて知り、改めて歴史と最先端が共存している都市なのだというを感じた。将来、再び韓国を訪れる機会があったら、都城を巡って歩いてみたい。

5. おわりに

このような貴重な機会を得ることができたことは本当に有意義であった。自分が置かれている環境を海外から見つめ直すことで多くの学びがあり、教育（や仕事）に対する考え方に大きな変容をもたらしたと考えている。最後に、韓国であたたかく我々を迎え入れてくれこのプログラムをサポートしてくださった方々、ご指導くださった本大学の先生方、ともに学びや感動、苦労などを共有できた同行の仲間に感謝を申し上げたい。